論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　甲　第　　号

氏　　名　王　侃良

論　文　題　目

荻生徂徠の言語論についての再検討
―「文理論」から「徂徠点」まで―

論文審査担当者

主査　　名古屋大学教授　齋藤　文俊

委員　　名古屋大学教授　釘貫　亨

委員　　名古屋大学教授　宮地　朝子

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

【本論文の概要】

本論文は、儒学者として著名な荻生徂徠（1666 – 1728）の言語論について、日本思想史・中国語学の研究をふまえた上で、日本語学的に再検討したものである。

まず序章において、本論で扱う「言語論」を、理論面だけではなく言語実践、すなわち、訓点本や国字解などに反映された徂徠の言語に対する態度についても含めることと定義し、その上で、徂徠の「言語論」の研究史を、①中国古典学・日本思想史分野における「儒学経典の読解、訓読と徂徠の漢文翻訳方法論」、②中国語学における「中国語に対する徂徠の分析法と日本中国語学の成立」という観点から整理した上で、③日本語学における「日本語史・日本語学史の中での徂徠の啓蒙的語学活動の位置づけ」についてまとめている。

第一章「荻生徂徠「言語論」に関する資料について―漢文典と訓点資料、国字解―」では、これまで先行研究で、「徂徠の言語論」の資料として使用されてきたものについて、各資料の序文・跋文などの記述をもとに再検討し、確実に徂徠の言語論が反映されているものを選定した上で、本研究の調査対象としている。その結果、理論面としての漢文典では、『訓訳示蒙』および『訳文筌蹄』初編と、後編の「文理三昧」、訓点資料では、『南斉書』『梁書』『六論衍義』『射学正宗』『射学正宗指迷集』、国字解では、『孫子国字解』と『射書類聚国字解』の二書が選定された。

第二章・第三章は理論面から考察を行っている。第二章「荻生徂徠「文理論」について―「文理三昧」を中心に―」では、徂徠の「文理三昧」と陳元贇（1587 – 1671）の『昇庵詩話』の記述を対照させることで、徂徠の文理論および、訓読否定、「看書論」などの主張が、陳元贇の影響を受けたものであることを明確にした。第三章「荻生徂徠における助字研究と『助語辞』」では、徂徠の助字研究が、『助語辞』（盧以緯（元代）著・胡文煥（明代）校）をもとにしていること、さらには「軽重」「死活」などの概念についても同書の記述を受け継いでいることを確認している。

第四章・第五章は徂徠の訓点資料・国字解を実際に読み解いて、そこに見られる徂徠の言語論のうち、特に言語実践としての面を考察している。まず、第四章「荻生徂徠の「訳文の学」と「徂徠点」」では、『南斉書』『梁書』『六論衍義』『射学正宗』『孫子国字解』『射書類聚国字解』を調査し、徂徠が提唱した「訳文の学」が、上記資料において、「左ルビ」として、当時の日常語を使用するという形で表れていることを示した。第五章「荻生徂徠の語学資料における左ルビについての考察―『射書類聚国字解』、『南斉書』、『梁書』を中心に―」は、その「左ルビ」についての考察である。『射書類聚国字解』を『射学正宗』と、そして『南斉書』、『梁書』を『六論衍義』と対比させることにより、左ルビの使用状況を検討した。その際、特に口語で書かれた『六論衍義』を使用することにより、原漢文の文体差と左ルビの使用方法の関係等が明らかになった。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

荻生徂徠は、古文辞学の提唱者であるとともに、自身の蘐園塾において、太宰春台、服部南郭ら多くの逸材を輩出し、また、柳沢吉保に仕えるなど、近世において多方面で重要な役割を担う漢学者であるが、日本語史、特に漢文訓読史の面からは、漢文訓読を否定し、漢文を中国語として読むことを主張した点で重要である。しかし、従来の研究はその「訓読否定」という点が強調され過ぎた嫌いがある。本研究は、その荻生徂徠の言語論を再検討し、それがどのように形成され、また実際の資料の中でどのように表れているのかについて論じたものである。

本論文の評価される点としては、以下の二点にまとめられる。まず第一点目は、使用する資料を厳選したことである。荻生徂徠の漢文訓読法（「徂徠点」）の研究資料としては、徂徠の訓読否定という主張から、その資料には無訓のものが多く、あるいはこれまでの漢文訓読という伝統的手法に沿わないものも見られ、さらには徂徠の名を付してはいるが、果たして徂徠が実際に関与したか不明なものまであり、これまでの研究者も様々な試行錯誤をしてきた。本論文では、第一章において、これまでの先行研究をふまえた上で、さらに各資料の序文・跋文などの記述を精査し、確実に徂徠の言語論が反映されているものを選定している。本論の検討過程は、今後の徂徠点研究、さらには日本語史研究の上でも大きく寄与するものである。

第二点目は、徂徠の言語論を、理論および実践の両面から検討したことである。理論面では、徂徠の言語論に影響を与えたものとして、陳元贇『昇庵詩話』、盧以緯・胡文煥『助語辞』を取り上げている。『昇庵詩話』が徂徠の言語論の形成に与えた影響、『助語辞』が徂徠以降の日本の漢語文典に与えた影響など、本論文の成果をもとに、今後の研究の広がりが期待できる。一方、実践の面では、「左ルビ」に着目し、上述のように第一章で「徂徠点」として厳選した資料から、その使用状況を整理したことが高く評価できる。この「左ルビ」の検討により、徂徠の言語論を日本語学的に考察することが可能となった。

ただ、課題とすべき点も見られた。徂徠以後に多く出された漢語文典との関係、さらには、中世以来のテニヲハ研究への言及がないことが惜しまれる。また、日本語史研究の面からは、徂徠が使用した「左ルビ」と当時の「日常語」との関係、本居宣長の『古今集遠鏡』などに見られる俗語訳との関係、さらには、白話小説の翻訳における「訓訳」との関係など、検証が不十分な点が多い。また、先行研究への言及や論証の方法についても改善の余地が認められる。しかし、これらはいずれも今後の研究課題でもあり、発展的課題の提起を果たしたという点でも、本論文の基本的な価値が損なわれるものではない。

以上により、審査委員は全員一致して、本論文が博士（文学）の学位を授与するのにふさわしいものと判断した。